

かまかけて、めでたし　こぼれ話

愛人と事には及ばず、甘い言葉を囁かれる関係くらいなら、夫を怒らすこともないだろう。そう考える浅はかな女が巷ちまたにあふれているが、このような不心得こそ、堕ちるところまで堕ちるよりも、さらに由々しき結果をまま招くものである。ラングドックはニームの貴族、ギサック侯爵夫人に起きたことこそ、ここで我々が戒めとして掲げんとすることの確かな証しである。

粗忽でうっかり屋、はたまた、陽気にして、なかなか機転も利き、心優しかったギサック夫人は、ドムラ男爵とやりとりした何通かの恋文が、あとで何か祟たたろうとはつゆ思わなかった。なぜなら、第一に、この手紙が人に知られることはないだろうし、また、仮に見つかっても、潔白の証しは立つから、夫の不興は何ら買わないですむと考えたのである。それは思い違いだった……ギサック氏は愠うれ気が甚だしかったため、夫人の交際を疑い、女中に尋ね、手紙を一通手に入れる。まずは懸念を裏付けるものとして何も無いというのに、それでも、疑いを逞しくするにはこれで十分すぎた。不安で矢も盾もたまらず、男はピストルとレモネードを注いだグラスを携え、怒り心頭に発して夫人の部屋に入る

……

「俺は裏切られた」と男は怒りにまかせて怒鳴る。「この短信を読め。これでわかったとも、もうためらう余地はない。おまえには死に方を選ばせてやろう」

侯爵夫人は釈明し、夫は勘違いしている、確かに自分に非があるとしても、それは軽率だったということであって、いささかも罪は犯していないと夫に誓う……

「もうだまされないぞ、この女狐め」と怒った夫は返す。「もうだまされやしないぞ、早く選べ、さもなきや、この剣で即刻おまえの命を断つてやる」

哀れ、おびえたギサック夫人は毒杯にしようと思いを決めると、これを手に取り、呑む。

「待て」少し呑んだところで、夫が言った。「死ぬのはおまえひとりじゃない。おまえに憎まれ、だまされた以上、この俺に生きてどうしていると言うんだ？」そう言うと、男は毒杯の残りを呑み干す。

「ああ！ あなた」とギサック夫人は叫ぶ。「あなたのせいでのことおり、ふたりとも大変な事になっているのですから、わたしが聴聞司祭を呼ぶのを嫌だと言わないでください、また、わたしが父や母に最後のキスができるように願います」

可哀想な女が求めた人たちに、すぐさま迎えが出される。夫人は命を授かった両親の胸に飛び込むと、自分に罪はないと明言を新たにす。しかし、自分が騙されたと信じ切り、妻をここまで手厳しく罰するために、自らの命を擲なげつしかない夫に、何の非難をぶつけられようか？ 絶望するほかはなく、一同そろって泣きの涙に暮れる。

その間に、聴聞司祭がやってくる……

「人生におけるこの辛い瞬間に」と侯爵夫人は言う。「両親の心を軽くし、死後のわが名誉のために、わたしの懺悔を皆様にお聞かせしたいと思えます」

そう言うと、夫人は高らかな声で、生まれてこの方、良心に咎めたことを残らず挙げて、その罪を認める。

夫は聞き耳を立てたが、ドムラ男爵の話は出てこないし、妻がこのようにときに隠し立てをするはずもないと確信もしたので、小躍りする思いで立ち上がる。

「おお、愛しいお父さん、お母さん」と、男は義父、義母をその手に同時に抱いて叫ぶ。「ご安心ください、それから、おふたりのお嬢さんには、私が怖い思いをさせたことを赦してもらいましょう。少々そういうことをしてもよいくらい、私を心配させたのですから。私たち呑んだもののどちらにも、毒など入っておりません。妻には安心願いたい。皆さんにもそのようにお願いします。ですが、妻にはこれだけは心に刻んでもらいたい。本当に立派な婦人なら、悪事を働かないのみならず、いささかも悪事を働ぐられてはならないのだということを」

侯爵夫人はやつのことで興奮から醒めた。夫人は毒を吞まされた信じ切っていたので、思い余って死ぬも同然の苦しみをすでに味わっていた。女は震えながら身を起すと、夫を抱きしめる。喜びが苦しみに取って代わる。こうして恐ろしい目に遭わされ、すっかり心を入れ替えた若い女は、この先は過ちのどんな些細な素振りすらも見せないと、しっかり誓う。夫人は約束を守り、その後三十年を夫と過ごし、夫はその間、妻を咎めるようなことは微塵たりともなかった。

## ガスコーニュもんの頓智 こぼれ話

ガスコーニュ(C)のとある将校が、ルイ十四世から百五十ピストールの心付けを頂戴した。その書き付けを手にしたまま、案内を通さずコルベール(C)氏の邸に入った。氏は諸侯と食卓を囲んでいた。

「申し訳ねえが、皆さんがたのどちらさんが」とお国訛り丸出しで男が言った。「コルベール様で？」

「わしだが」と大臣は答えた。「何かお力になれることでも？」

「たいしたことじゃないんですがね、旦那、百五十ピストールの心付けのことで、こいつを今すぐどうしても換金してもらいたいってだけでして」

この男は何か愉しませてくれそうだと目敏く察したコルベール氏は、午餐(C)を済ませる許しを男に求め、また、彼がいくらかでも気を揉まずにすむよう、一緒に食卓に着くよう願う。

「そりゃ喜んで」とガスコーニュもんは返した。「なんせ、昼を食べてねえもんで」

食事が終わり、秘書頭に何事か伝えさせた大臣は、執務室へ上がってよい、金はそこにあると例の将校に言った。ガスコーニュの男がやって来る……だが、お金は百ピストールしかない。

「これはお戯れを」と男は秘書官に言った。「百五十ピストールの書き付けを、ご覧にならなかつたんで？」  
「お言葉ですが」と書記は返す。「書き付けならしかと拝見いたしました。が、午餐の代金に五十ピストール頂戴致しました」

「ばか言うでねえ、泊まっている宿じゃ昼飯などほんの二十ソル〔五百円程度〕じゃがな」

「確かに。しかし、それでは大臣と午餐をともにする榮には浴しませんな」

「そうですかい」とガスコーニュもんは言った。「そんなら、全部取りやいい。明日、仲の良いのをひとり連れてきますから、それでおたがい貸し借りなしとしましよや」

この返答と、このようにやり返させた冗談は、宮廷の人々をいつとき楽しませた。ガスコーニュの男は恩給を五十ピストール追加された。男は故郷に錦を飾ると、コルベール氏との午餐、ヴェルサイユ、そして、彼の地の人々が、ガロ  
ンヌ〔四〕の頓智にどのように報いたか褒めちぎった。

## 泥にはまった司教　こぼれ話

信仰篤い人間が、悪態をついてもらうのを思い浮かべると、なかなか珍妙なものである。この方々が考えるところでは、アルファベットのある文字をしかじかの意味になるように組み合わせると、こうした意味のあるものについては、神がその文字をこよなくお気に召し、また同様に、これが別の意味であった場合には、神を激しく侮辱するのだという。これは思い込みには違いないが、また、盲信の輩の目を曇らせている思い込みのなかでも可笑しなこと屈指のものである。今世紀の初頭、聖者で通っていたミルポワの元司教も、こうした「b」とか「f」で始まる言葉を口にするのをためらう方々のひとりだった。ある日のこと、パミエの司教に会いに出かけたところ、このふたつの町を隔てるひどい悪路で、狎下の四輪馬車は泥にはまった。如何ともし難く、馬どもはもはや動こうとしなかった。

御者はとうとう痲癩を起こし、「狎下」と言った。「狎下がそこにいらっしゃるかぎり、馬は進みません」  
「また、なぜかね？」と司教は返した。

「どうしても悪態をつかなきゃならないんですが、狎下がそれを禁じておられるからです。狎下がお許しにならないければ、我々はここで寝ることになります」

「そうか、わかった」と、司教は表向き穏やかに十字を切って言った。「では、罵るがよい、だが、ほんの少しな」  
御者は罵り、馬は牽<sup>ひ</sup>く、ふたたび狷下は車に乗り……一行は無事に到着する。